

寛容の教育

青山学院大学で二月中旬、イギリスの教育学者、ロバート・ジャクソン・ウォリック大学教授の「多元社会における宗教的市民性教育」という講演を聞いた。ヨーロッパ諸国で行われている宗教教育の実情が報告されたが、とくに宗教的寛容教育について、日本の学校の立ち後れを痛感させられた。

法律で「宗教教育は必修」と定めているドイツでは、公立学校でもキリスト教をしっかりと教えている。宗派教育ともいえる内容で、ジャクソン教授は「宗教への教育」(into)と分類した。東欧革命後のポーラン

南無

善財

すがわらのぶお
菅原伸郎

東京医療保健大学教授

ドも同じ姿勢で、カトリック神父が学校で教えているようだ。

逆に、フランスは公立学校から宗教色を排除している。貴族と僧侶に反逆して大革命を起こした国柄であり、最近もイスラームの女生徒にスカーフの着用を禁止して話題になった。といって宗教を否定しているわけでもなく、歴史や分布などの知識教育、つまり「宗教についての教育」(about)は行っている。

このほか、いわば「宗教からの教

育」(from)という姿勢もありえる。

開祖や宗祖の教えや願いを背景に生き方を教えるのだ。ジャクソン教授によると、イギリスの学校はこの指導とフランスの知識教育との中間を指しているようだ。

仏教以外にも多くの宗教が混在する日本では、ドイツ型の指導はありえない。しかし、教師にもう少し宗教を学ぶ姿勢があれば、イギリス型はありえるかもしれない。

ともあれ、EU諸国の学校はそれぞれの歴史と文化に基づいて宗教を教えてきた。しかし、ユーロが流通する時代に、教育がこれほど違っていいののか、という声も出てくる。無神論を半世紀近くも教えてきた旧社会主義国では、なぜキリスト

教が優先なのか、といった不満も根強いようだ。

また、イスラーム圏などからの移住者がふえ、ヨーロッパ社会はますます多様化している。そうになると、指導の重点も変わりつつある。とくに9・11事件以後は、宗教教育は個人のためだけでなく、社会の安全のためにも大切だ、という期待が広まっているようだ。宗教的寛容の指導について、ジャクソン教授はこんな提言をした。

「多文化・多宗教の社会で平和に共存していく最小限の目標として、学校はまず、自分がどんなに否定することでも忍耐できる心を養うべきです。さらに、他者が大切にされる価値や伝統に対して敬意を持つよう教え

たい。そして、異なる信仰や慣習を持つ人々との出会いが、自分を豊かにもしてくれる学びであることを理解させたいものです」

表面的な忍耐はもちろん、他者への敬意、さらには学びにまで進んでこそ、寛容の教育は完成するのである。この指摘を聞きながら、日本ではこうした議論が少なすぎることを思い知らされた。道徳教育は「愛国心」にとらわれているが、これだけ外国との交流が盛んな時代なのだ。他者への「忍耐、敬意、学び」に

もつと取り組むべきだろう。

実は、教育基本法も旧法の第九条で、新法の第一五条で「宗教に関する寛容の態度……は、教育上尊重されなければならない」と命じているのだ。しかし、学習指導要領に「寛容」という言葉が一つも載っていないように、文部科学省から学校現場まで、怠慢ともいえるべきである。

「日本人はもともと寛容です」などという楽天主人もいる。しかし、「仏法に自他なし」と澄まっていた寺院が部落差別に加担していた事実もある。不勉強や無関心は知らないうちに非寛容を生むものだ。ジャクソン教授の提言に学んで、寛容の指導を手始めにして「宗教からの教育」を目指してはどうだろうか。

